

先々週の月曜朝礼で、私は奈良に出張していたという話をしました。奈良と言えば大仏。



私も奈良の大仏さんを見てきました。正式には「盧舎那仏（るしやなぶつ）」とか「毘盧遮那仏（びるしやなぶつ）」と言います。

大仏さんの頭のぽつぽつを螺髪（らほつ）と言います。昔は、その数九百六十六個と言われていました。二〇一五年、レーザー光線を使った最新の研究で、四百九十二個であることが分かり、今ではパンフレットや東大寺の公式ホームページに、四百九十二個と書かれています。

螺髪の一つは、高さ二十一センチ、直径二十二センチ。ちよほどのゴミ箱くらいの大さきです。（実物提示）今も頭についているのは、四百八十三個で、九個が、はずれて落ちてしまったようです。大仏の高さは十五メートル。五階建てのビルくらいの高さです。螺髪一個の重さは1.2kg。これが落ちてくることを考えただけでも怖いですね。

奈良と言えば鹿。大仏さんの近くにも鹿がたくさんいました。昔の話。二作（さんさく・みのさく）という子が、寺子屋で字を書いていたところ、鹿が来てお手本を食べてしまいました。三作はびっくりして、やめさせるた

めに、手元にあった文鎮のようなものを鹿に投げつけたのだそうです。あいにく当たり所が悪く、鹿は死んでしまいました。春日大社の鹿は、神の使いとして大切にされていて、江戸時代までは、鹿を殺した者は誰でも、理由を問わず死刑と決まっていたようです。かわいそうに三作は、鹿の死体と共に穴に入れられ、その上からたくさんの石を投げつけ、重みで殺す「石子詰め」の刑にされて亡くなりました。

聖書のヨハネによる福音書にも同じような話が出ています。

ある時、イエス様の所にファリサイ派の律法学者が訪ねてきます。この人たちは、モーセの教えを研究して、おきてや決まり、マナーやルールをガチガチに守るだけではなく、人にもそれを強要する人たちのようです。

そのファリサイ派の人たちが罪を犯したという女性を連れてきて、モーセの律法によると、重い罪を犯した者は、石打ちの刑（石を投げつけて殺す刑）にすると書いてある。あなたはどうしますかと、イエス様に迫ります。

イエス様のことだから、それは神の愛に背くことですよと違うに違いない。そうしたら、律法違反として、イエス様を処罰できると、ファリサイ派の人たちは考えたようです。

イエス様は「あなたがたの中で罪のない者が、まず、この女性に石を投げつけるがよい。」とひと言。ファリサイ派の人たちは、一人去

り、二人去りして、誰もいなくなったようです。イエス様はその女性に、「あなたに石を投げつける人はいませんでした。私もあなたに石を投げません。行きなさい。今から決して罪を犯してはなりません。」と、おっしゃったのだそうです。

どうやらファリサイ派の人たちにも、罪を犯さない人間など存在しない。「罪」は不完全という意味もあるので、罪がない人というのは、神様と同じであると言っているようなものだと分かったようなのです。だからその場から去って行ったのです。

今、ネットの世界、特にSNSで、「ルールを破る人間が悪い。世間の多くの人がそう思っている。自分は正義だから、正義の名のもとに悪をやつつけるのは当然。」と、徹底的に人を追い詰める人が多くなっています。アメリカでは、「ソーシャル・ジャスティス・ウオリアー」社会正義のために戦う人」と言って、正義を振りかざして他人を攻撃する人のことをこう呼んで馬鹿にしているようです。ソーシャル・ジャスティス・ウオリアーの人って、なんだかファリサイ派の人たちに少し似ているところがありませんか。

完璧な人間なんていません。誰でも失敗や間違いを犯します。立教小学校で学ぶほど、ちは、イエス様に倣って、正しいことほど、優しい言葉で、丁寧に話せる人になりたいものです。（立教小学校校長 田代 正行）